

2023年1月15日（日）主日朝礼拝説教

『水と聖霊による洗礼』井上隆晶牧師
ローマ6章3～11節、マタイ福音書3章11～17節

①【洗礼はすべてをキリストにお任せすることである】

私が洗礼を受けたのは1982年12月19日のクリスマス、23歳の時でした。妻と一緒に洗礼を受けました。信仰について難しいことは分かりませんでした。ただ単純に罪が赦され、清くなりたかったからだと思います。今年で受洗41年になります。今日まで信仰が守られてきましたが、これも自分の力ではないと思います。先日「YWCA 聖書を学ぶ会」でも洗礼の話をしました。女学院の時に洗礼を受けた人、戦後すぐに洗礼を受けた人、むりやりに洗礼を授けられた人、求道生活が長かった人、いろいろでした。なぜ洗礼を受けたのか、それは不思議です。「なぜか分からないけれど、無性に受けたくなくなった」としか言いようがありません。パウロの言葉を借りるなら「キリスト・イエスに捕らえられている」（フィリピ3：12）からなのだと思います。一人の信仰者を生み出すのは神の業であり、洗礼への願いを起こさせ、それを実現させるのも神なのです。

洗礼を受けたからといって罪を犯さなくなった訳ではありませんし、立派な清い人間になった訳でもありません。今でも毎日罪を犯しますし、悪い思いが湧いてきます。ただ一つはっきりしているのは、洗礼というのは主人が変わることなのです。以前、私たちは「律法」という主人のもとで生きていました。律法（神の戒め）によれば、私たちは失格者であり、天国に入れません。でも私を支配される方が変わったのです。キリストに結ばれ、キリストの愛と赦しの支配下に私は置かれました。キリストが私の主人になったのです。だから法則が変わったのです。キリストの愛が新しい法なのです。パウロもそのことを「あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい」（ローマ6：11）といています。信仰には二種類あります。一つはキリスト神を喜ぶ信仰であり、もう一つは、何かが出来た自分を喜ぶ信仰です。前者を福音といい、後者を律法といいます。福音はキリストに心が向きますが、律法は自分に心が向いています。福音はキリストの愛を信じますが、律法は自分の行いを信じようとします。私たちはキリストの愛を信じます。だから洗礼を受けるというのは、立派な人になることではなくて、キリストを信じてどうしようもない自分を委ねてしまうことです。三浦綾子さんの言葉を借りれば「キリスト教の愛とは、厳密にいうと『神ご一任』のことであって、神の愛だけなんです。」

②【連帯と分かち合いこそキリストの姿】

さて、イエス様は罪人たちの列に並んで順番を待ち、罪人と同じようにヨハネの

手から洗礼を受けようとされます。ヨハネは自分の前に現れたイエス様を見て驚き、洗礼を受けるのを辞退しようとし、**「私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、私のところへ来られたのですか」**(マタイ 3:14)。洗礼を受けるのを辞退しようとしたヨハネに対してイエス様はこう言われました。**「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、われわれにふさわしいことです。」**(マタイ 3:15)「正しいこと」とは洗礼を受けることです。主が**「われわれにふさわしい」**と言われた言葉に注目して下さい。イエス様は罪のない神の子であり、洗礼を受ける必要はありません。それなのに洗礼を受けたのは、ご自分の為ではなく私たちの為なのです。**「われわれ」**という言葉をもって、罪ある人間の仲間になって下さったのです。神は人間とすべてを分かち合い、徹底的に人間と連帯されたのです。神は人となって人間性を分かち合っただけでなく、人間特有の罪や病や死をも分かち合います。良いものだったら誰でも分かち合いをします。しかし嫌なものを誰が分かち合ってくれるのでしょうか。人の罪を負いたい者が誰かいるのでしょうか。恥や汚れや嘲笑を一緒に受けてくれる者がどこにいますでしょうか。病気を引き受けてくれる者が一体どこにいますでしょうか。しかし神とはそういうお方なのです。神は人を断罪する方ではなく、底知れぬ愛、あなたを見捨てない愛なのです。

●「1987年ヨハネ・パウロ二世は9月17日サンフランシスコのドローレス・ミッション教会でエイズ患者に接見していました。教皇はエイズ患者に「神はあなたたちを差別することなく、際限なく、無条件に愛しておられる」といって一人一人に声をかけ、握手をしていました。その時、突然、青い目の小ぢやなブランドン・オー・ロックくんが抱かれていた父親の腕を振り払って、教皇の懐に飛び込んで来たのです。輸血でエイズに感染してしまった5歳の子にも、苦悩の毎日が始まりました。教皇は何のためらいもなく、その子のふくれ上がった顔の傷に接吻なされた時、アメリカの良心はそこに「教皇の心」以上に、「イエスの心」を読み取ったことでしょう。」

同じようになるということは、その子の悲しみ、悔しさ、寂しさを自分も共に負うということです。共に苦しんでくれる、同じようになってくれるということは本当に有り難いことです。**「あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」**とヨハネはいいましたが、その通りなのです。人が自分の力では天国に昇れないので、キリストがあなたの所まで降られたのです。

③【神の家族になるということ】

今日は読みませんでした。ルカの福音書を読むとマタイと少し違います。「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」(ルカ 3:21~22)とあります。洗礼を受けてイエス様は祈っておられたのです。すると天が開いて、聖霊が鳩の姿で降って来たのです。何かとても静かな、穏やかなイメージがします。ル

カは何を言おうとしたのでしょうか。この後、ルカはイエス様の系図を載せています。「イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。イエスはヨセフの子と思われていた。ヨセフはエリの子…」から初めてアダムまでさかのぼり、最後は「そして神に至る」(ルカ 3:38)と結んでいます。つまりルカはこういいたいのです。旧約聖書の最後の書はマラキ書ですが、そこから約 600 年の間、預言者は現れませんでした。預言者たちの声は消え、神は沈黙しておられるようで、天も閉ざされたままだったのです。人類と神との関係は切れてしまったように見えました。しかし神の子キリストが天から地に降り、人間となって父なる神に祈られた時、閉じた天が再び開き、神は答えられ、天と地はつながったのです。人はキリストを通して神との対話、祈りをするできるようになったのです。マタイも「天がイエスに向かって開いた」(マタイ 3:16)と書いています。系図もそれを教えているのです。人間はもともと神から出た、神の子孫なのに、まるで悪魔の子孫のようになってしまいました。しかしキリストは人となって神と人を結び直し、神との関係を回復してくださったのです。私たちはキリストによってもう一度、「神の子」になり、神の家族、神の子孫になることができるようになったのです。こうして父なる神と、イエス・キリストが人類の歴史をご自分のものとして引き受けられ、背負われたことが分かります。人間の歴史は神の歴史になったのです。

●ヘンリー・ナウエンはこう言っています。

「自分は神に愛されているという真理を確認するたびに、私たちの生き方はより広く、より深くなっていきます。…私たちは生まれた時に神に愛される者となり、死ぬ時にそれを止めるわけではありません。神に愛されていることは永遠のことです。神は言われます。『私はとこしえの愛をもってあなたを愛した』(エレミヤ 31:3) この愛は父や母が私たちを愛してくれる以前から存在し、友人たちに死を看取られた後もずっと続くものです。それこそが神の愛であり、絶えることのない永遠のものです。…」

口語訳では「私は限りなき愛をもってあなたを愛している」です。英語では「I have loved you with an everlasting love.」です。「永久に続く、不朽の、果てしない、永遠の愛」で私たちは愛されています。ソロモンはコヘレトの言葉でこの世を見て「何という空しさ、すべては空しい」(1:2)と嘆きましたが、3章では「神のなされることは皆その時になんて美しい。」(3:11)と賛美しました。神、キリストが空しいものを、そうでないものに変えられるからです。神は今日もこの永遠の愛で世界を愛し、私たちを愛して下さっています。この世界がどれだけ混沌とし、落ちて行こうとしても、その世界の中にキリストは入って来られ、それを支え、高く引き上げ、負い続けてくださっています。聖霊はこの世界を覆い、包んでくださっています。その神の愛を信頼して、委ねて生きましょう。